

「総理が親指を立てたでしょう。私はあれで、彼が辞任の気持ちを感じました」。六月二日朝、鳩山由紀夫総理の辞任会見をテレビ中継で観ながら、地元（衆院北海道九区）後援会の有力者の一人は語った。国会内で小沢一郎・民主党幹事長とのトップ会談を終えた六月一日夕、「続投ですか？」の記者の声に応えるように鳩山氏は左手の親指を立てるサムアップのポーズを見せた。「やっただぜ！」の意味にもとれるサインはその夜のうちに思惑を広げた。「続投」への意思表示か？ 地元では「小沢幹事長を道連れに自らも辞す腹だ。あのポーズは（同時辞任への）道筋をつけたことを伝えるサイン」と受け止める人々がいた。「小沢さんとの会談の結果、仮に総理の続投が決まったとしても、鳩山さんはあんなサインを出す人じゃない」と。

決断力やリーダーシップが折に触れて問われた鳩山氏は、ぎりぎりの場面で小沢氏を道連れに辞任した。「小沢切り」は鳩山内閣が手がけた最後の「事業仕分け」となった。それは、小沢氏が体現した「古い政治」との決別の表明でもあった。政策決定過程の透明化、国会議員全員が参加出来るシステムの提示など、鳩山内閣の挫折を下敷きにした新しい党運営に今、多くの視線が集まる。

「小沢氏排除」の成果は世論調査に敏感に現れた。鳩山内閣の総辞職を受けてマスコミ各社が六月四、五日に行った調査では民主党支持率が劇的に「V字回復」した。朝日、毎日新聞、共同通信の調査によると、民主党の支持率（カッコ内は五月二十九、三十日調査）はそれぞれ三二％（二七％）、

「地方」の底力が改めて問われる

二八％（一七％）、三六％（二〇％）と上昇。対する自民党は一四％（一六％）、一四％（一七％）、二〇％（二四％）とそろって下落した。菅直人首相へ期待を込めた「祝儀相場」気分もあるだろう。しかし、同じ調査では小沢幹事長の辞任を「評価する」が八〇％台を占めており、小沢氏が与党中枢で権勢を振るうことに多くの有権者が深い閉塞感を抱えていたことをうかがわせる。「政治と金」を問われて漂流を始めた政権党にとっては久々にスカッとした「青空」が広がったような感じだろうか。

小沢氏は「一致結束、箱弁当」の言葉通り、強烈な結束力を誇った自民党の旧田中派で頭角を現し四十七歳で自民党幹事長も努めた政界の実力者だ。小沢流の政治は「力の政治」であり、権力の中枢で「教」を握るために選挙戦を制することを何にも増して重視した。例えば、〇九年十二月十日、党所属の国会議員百四十三人を含む六百四十人の大訪中団を引き連れて北京空港に降り立った小沢幹事長は、胡锦涛国家主席との会談で自らを「人民解放軍」の指揮官になぞらえて語った。「解放の戦いはまだ終わっていない。夏に最終決戦がある。戦いに備えて兵を募り、鍛え、勝利を目指している。政権は鳩山総理に任せ、野戦軍の最高司令官として解放戦が終わるまでそれに徹していきたい」。〇九年衆院選で完勝した小沢氏にとって今夏の参院選は、政権交代の総仕上げであり、最終決戦と位置づけられた。

勝ち抜くための態勢作りも着々と講じた。自治体や業界団体の陳情は幹事長室で一括して受け付け、小沢氏らが案件を絞り込ん

で政府に伝えるシステムもそのひとつ。議員による政官癒着や利益誘導を排除し、党の地方組織を強化することも目的の一つとされた。しかし、公共事業の個所付け情報や幹事長室から地域に流れたとして批判され、公共事業の配分と民主党への忠誠とを結びつけて語られるシーンもあった。「自民党を焼け野原にする」ための野戦の仕掛けではあったが、小沢氏が党と政府を本質的に動かす二重権力の構造も次第に顕になった。

参院選が近づくと、小沢氏が「最終決戦」と位置づけた選挙戦に小沢氏抜きで挑む構図。菅内閣の最大の試練だ。党の指導力と地方組織を含めた底力が問われる。「政権交代」を最大の争点にして戦った〇九年夏の総選挙以来、「やっただ」「やっただ」と津々浦々に満ちあふれた浮かれ気分はさすがに冷めたにしても、政権与党として過ごした八カ月間に地方組織が着々と力を蓄えてきたとは言えない。それについても痛々しいのは自民党だ。「脱小沢」に急ハンドルを切った民主党が素早く回復基調に乗ったように見えるのは裏腹に自民党は統落の気配が強い。菅内閣発足に伴う世論調査（六月八、九日）でも「参院選比例区の投票先」で民主と自民には二・三倍の開きが出た。自民は気づかぬまま抜き差しならぬ負のイメージを抱えているのかも知れない。要因のひとつは恐らく世代交代の遅滞だ。政治ネタがテレビの視聴率を押し上げている状況で、自民の実力者たちはどう見てもテレビ向きとは言えないではないか。

（圭）